

## 有吉佐和子「複合汚染」をめぐって

根平邦人

この本を私は3回読んだことになる。最初は朝日新聞の連載で、断片的に。次はまとまった一冊(上、下2巻)の本として一気に読んでしまった。その時の読後感を私は次のように記している。「小説家がこれほどの本を書くとは驚きた。有吉氏の行動力に感服した。こまかい点でミスはあるかも知れないが、今日的な問題を勇気をもって筆にしたすばらしい仕事だと思う。……」と。そして私はこの書評のために今一度読み返したのである。やはり複合汚染の実体をまのあたりにみる思いで少なからずショックを受けた。人間はおかしてはならぬ自然というタブーを犯し、今やとりかえしのつかない状況に地球を追いやってしまったのでは。なんとかせねばという思いがつのるばかりであった。

著者の有吉佐和子については、ことさら述べるまでもないが、「紀ノ川」、「華岡清洲の妻」そして「恍惚の人」などで知られる社会派の女流作家であり、ジャーナリスト的な感覚にもたけた才能の持主である。したがって公害問題に関する小説が世に出るとなると、その社会に与える影響は計りしれないものがある。

この小説(小説といえるかどうか疑問)は参議院議員選挙の運動シーンから始まる。市川房枝とか、青島幸男、紀平梯子、野坂昭如といった有名人が実名で登場するので、まず意表をつかれるが、これは読者をひきつけるに効果充分といったところ。公害の話題はまず農薬がとりあげられ、DDTに代表される殺虫剤が生物界の秩序を乱すものだといった実例を豊富な資料に基づいて小説家らしい筆運びで、解り易く説いていく。化学肥料の危険性を指摘する一方、有機農法の意義を評価し、「土づくり」を歌いあげる。ゴキブリがイチコロでまいる合成洗剤の毒性にふれたり、食品添加物の危険性をあげて行政当局のふがいなさを指摘するのである。さらに自動車の排気ガスにも焦点を当てて、大気汚染という社会悪が日本に充満していることを報らせてくれる。反面、このような公害社会に抵抗して地味に生きぬいている人々を生き活きと描くことも忘れていない。無農薬運動を推進している有機農業研究会、農村の

食生活の改善指導を献心的におこなっている奈良県五条市の開業医、あるいは防腐剤も人工調味料も着色剤も使用せず、黙々と本物のしば漬を頑固に漬けている京都の漬物屋さんのことなど。またコンパニオン・プランツについて一人こつこつと研究を続けている篤農家のはなしもでてきて、私を楽しませた部分もあった。

これらの事実について、また資料について一つ一つ文句をつける知識も能力も私はもちあわせていないので、なんとも批判のしようがないが、小説という形式で、一般市民に公害の実体を訴えた功績は極めて大きなものがあり、数年前に出版されたテイラーの「人間に未来はあるか」あるいはカーソン女史の「サイレント・スプリング」などの訳本とは違って、社会的意味があるように思う。

「複合汚染」の反響はやはり大きく、当然さまざまな反論もでてきた。農林省は次のような見解を述べている(朝日新聞昭和50年12月29日付)。「安全性はたえず追求していて、決して軽視していない。農薬や化学肥料類を使わない有機農法の意義は評価できるが、一般農法として有機農法のみにとよるのはむずかしい」と。また「複合汚染への反証」と題する本では、有吉氏の意気込みをある程度評価しながらも、かなり厳しい反論がなされている。これはジャーナリストを含む7人の学者が、それぞれの専門の立場から具体的データを提示しつつ有吉氏の誤りをえぐりだしたものである。この中で、見里朝正氏は農薬の使用について有吉氏とは全く違った見解をとっている。「農薬そのものが自然生態系の破壊の上にか成り立得ない宿命をもっている。自然を切り開いて、田畑や果樹園をつくれば、そこに生息する生物相も変わってくる。水田をつくり、稲を植えたら、稲の病害虫が大発生するのである。水田をつくったことが人為的である以上、そのために発生した病害虫は、人為的に除かざるを得ない。そこに農薬の必然性がある」というものである。

私たちは双方のいい分をどう受け止めたらいのか。実のところ私自身勉強不足でよく解らない。有吉氏の小説の内容を全面的にうけいれるにせよ、あ

る。はその反論を踏まえてみても、私たちの周辺にはすでに公害物質が浸透してきていて、生物を蝕んでいるのである。このままではいけないことは明白である。本を読んだり、資料を多くみたところで、所詮それらの実体を私たちは理解できるだけであり、新しい事態は何も生まれて来やしない。もうここまでくると、公害という社会悪をいろいろの所で、さまざまな形で、一人一人が実感としてとらえ、その恐ろしさをそれぞれの心の中に刻みつつ生活することが緊急のことだと思う。この精神こそが知らず知らずのうちに公害防止につながっていくのではないか。

私は生物の不思議さにひかれ、地味な仕事を、との願いで生物学を選んだ。これであればこつこつと楽しく人生が送れると甘い夢を描いていた。ところがどうだろう。さきに述べてきたように公害物質が文明社会に次第に浸透してきて、もうとりかえしのつかない状態にまでなってきたのである。公害は生物の、人類の生存の問題と深く関わりあっている。全く予想もしない形で、生物学は社会と結びつくようになってきた。現時点で、人類生存の活路を見出さねばならない。

大気汚染はとくに植物の生育状態に微妙に影響を与える。ふと思いたった私は、昨年10月下旬、4日間かけて、広島市街地のキンモクセイの開花状況についての簡単な調査をした。キンモクセイの花が咲

くか咲かないかは、大気汚染度を知る指標になるらしいことがある程度判っていたので、それを自分の目で確かめたいためである。答えはどうかといえそうだが。さらに私は正月休みを利用して、市内の緑地帯の植物の活力度度についての予備調査を開始した。結果は5年位先のことになるだろうが、これらの調査を通して私も生物を見る目をさらに肥やしたいという意図から行なったことである。実感として公害の状況を把握することが、公害防止の原点であると私は思っているからにはほかならない。

それにしても神経を尖らせながら生きねばならぬこの世を憂える。書評が少し脱線したようだ。お許し願いたい。

(自然環境研究 助教授)



# 学部の記録

## 人事移動

〈採用〉

小南 思郎(自然環境研究 助手) 12月1日付  
佐々木 紘(情報行動基礎研究 教務員) //

## 各種行事報告

昭50.12.6(土)～

総合科学部創立一周年記念行事

○記念講演会(大会議室)13.00～

① 演題:気象学への感懐 一気象と予測一

講師:気象庁長官 毛利圭太郎氏

② 演題:広島大学に期待するもの

講師:文部省学術国際局長 木田 宏氏

○記念祝賀会 15.30～

記念祝賀会終了後、広島高等学校同窓生有志と学生との懇談会を行った。

## 編集後記

### 「絶望」

心に重く沈殿しているものを  
溶かし出したらどんなにか楽だろうに  
だけど  
口唇は検門のように閉ざされて  
ただ軽い言葉だけが  
風に乗って消えていく。  
心の中のわだかまりは  
理性によって打ち固められ  
感覚を鈍らせる  
恐いんだ  
寂しいんだ  
口に出したことに誰もついてこなくて  
一人ぼっちになることが。  
好きでやってるわけじゃないけど  
自分の心を素直に出せる世界にしたい  
でも  
そんなこと考える時間さえムダだなんて  
悲しいこと言わないで欲しい。

学部創設の意気に燃え、教官・事務・学生のパイプ役として“飛翔”の編集に参加してから一年余、これで4号目だけど、一人相撲に終わってしまった。本号には僕も投稿し、あの時はいくらかヤル気を持っていたんだけど、1月にキャンパスに戻ってくると、意欲ありと見ていた者たちが「ちかれたびー」という状態になっている。少数じゃ何にもできない。多数でなければ無価値のものがある。

本号は当初2月初旬発行の予定だったが、原稿が集まらず、形式上3月に、実際は4月に配布することになった。新入生諸君は今これを手にしていることだろう。このことは、“飛翔”がそのメリットを活用されず、学部から浮き上がったものとなっていることを示している。もう誰も“飛翔”に興味ないみたいだ。学部自体にしてもそうだから仕方ないんだろうけど。僕ら少数の者だけやってたって、み

んながやらなきゃ価値はないね。だってそうだろう。僕ら一部の者のためにあるんじゃないで、学部みんなのためにあるんだからね。だから僕自身はほとんどやらないけど、Nみたいに原稿を「お願い」に回るといのは、どう考えてもおかしいね。みんなの学部報なんだから“自然に”教官からも事務からも学生からも原稿が集まってしかりなんだ。でもどういわけか、広報委員は活動が無償にしては頭を下げねばならず、やっと発行しても無反応で誌上討論も生まれず、自分たちがアホらしくなってくる。記事がないから企画なんかを考えて……本当はそんなもの必要ないのに。楽しませるため作ってんのとチガウ、意思疎通が根本目標なんだ。

先日編集会議を開いても5・6人しか集まらない。

3者全部でだ。僕個人に言わせれば、もう飛翔は存続の価値がない。我々は愛想が尽きてきているし、新2年生の中には誰一人やろうとする者はいない。無理に委員を作っても続かないだろうし形式化するだろう。新入生の中からも、「学部は成ってない。創っていかなきゃ」と痛感する人が現われない限り、飛翔は形骸化し、それでも少なくとも教官側によって消滅することなく醜態をさらし続けるだろう。まさに学部の未来を見る思いである。いったん設立された学部は現体制では無くなることはない。中味がどんなに腐敗してでもだ。

ワカッテル者たちは居すわり、ヤリキレナイ者たちは見切りをつけて大学を去る。やはり大学からは新しい文化は生まれないのかねえ。和光大学でこの総合科学部と同じことをしたそうだが、結果は失敗だったらしい。学生が総合科学部という、ひょっとすると新文化が生まれる希望がある運動の一翼を担うのでなければ、和光大学の二の轍を踏むと思う。そりゃ事ナカレ主義の方がラクだろうけどさあ、諸君ノどうかね。新入生の人たちは?

(1月末、学生M)